

魚は水に 女は家に

田辺聖子



魚は水に女は家に

田辺聖子



新潮社

魚は水に女は家に
さかな みづ おんな いえ

一九七九年五月二五日 発行
一九七九年八月一〇日 四刷

著者 田辺聖子
たなべ せいこ

発行者 佐藤亮一
さとう せいいち

発行所 株式会社新潮社

東京都新宿区矢来町七一

郵便番号 一六二

電話 (業務部) 03-26615111
(編集部) 03-26615411

振替東京四一八〇八

印刷 大日本印刷株式会社

製本 新宿加藤製本株式会社

定価 七五〇円



© Seiko Tanabe, 1979
Printed in Japan

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付
下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

桃色のドレス	5
女子と小人	47
ほろ酔い	85
中年の雨	134
友情旅行	172
出発まで	210

裝幀
離本
唯人

魚は水に女は家に

桃色のドレス

舟子^{ふねこ}はドレスを着て、姿見の前に立ち、ホレボレした。

若々しくって女らしくてゆたかな、とびきりの美人が自分なのだ。

濃いピンクの、しなやかなデシンの服のせいだ。

同じ作るなら、と思い切っていい生地を使い、かねて宿願のピンクをえらんだのだ。

ピンク、というより、

〈桃色〉

といった方がいい、暖かな、はなやかな色である。

(とてもお似合いですよ。はんなり、して……)

と、いつも服を縫ってもらう井関久女子^{くみこ}がほめた。はんなり、というのは、大阪弁で、ぱつとはれやかな、という風な意味の言葉であるが、一面、おちついた華やかさ、というひびきもあり、突飛に派手、という意味はないのである。

仮縫のとき、ドキドキして舟子は着てみたが、仮縫ではよく感じがつかめなかった。衿元には麻布や白布のシンがくっついていたり、シツケ糸があつたりして、出来上りを想像しにくい。それですこし不安でもあったが、しかし、いまこうやって着てみると、しっくりと似合うように思う。何年も前から、ひそかに思っていた通り、あんがいピンクが似合うのだ。このぶんでは、真ッ赤な色も似合うかもしれない。

舟子は四十三歳である。

しかし、あんまり顔にシワやシミはない。

いつか習字教室で知り合いになった若林夫人が、

(女って、五十代ごろが女盛りですわ。肌もあぶらがのりますし。私なんぞの年になるとボチボチ衰えますけどね)

といい、夫人はたしか七十四、五のはず、

(高瀬さんなんか、まだ思春期いふもんですやろなあ)

とかるく舟子はいわれて、気をのまれたことがある。

このごろはしかし、

(そうかもしれへん……)

と思うようになってきた。

舟子はノンキなところがあるから、昔の自分の若く美しかったことは忘れて、今の方が、まだ大分マシだと、鏡

を見て思える。

髪を染めてシラガをかくしたり、齒の手入れをしたりしながら、やつぱり、

(まだ、いけまっせ……)

なんて、鏡をみて思っている。

五十代が女ざかりとすると、舟子はいま、女ざかりにさしかかろうとするところである。

ただ、下半身にすこし肉がつきすぎてゐる氣もするが、それはまあ、せいぜい見えないようにすればいいのだ。顔にシワやシミがないと、とか、色がわりに白くて、白粉のノリがいいと、とか、丸顔で、あんまり美人でないところが、老いても目立たぬとか、美点ばかりみつければいいのだ。

だから始めて着たピンクが、こんなに似合うのだ。

舟子はこのごろ頼に、ピンク色が好きになった。

四十を過ぎて、いや、四十を過ぎたからこそ、ピンクが好きになった。

ちよつと昔、三十四、五になったころは赤が好きになっていた。現在でこそ、三十四、五のミセスが、若い娘さんと同じように、真ッ赤なオーバーやワンピースを着ていても、そんなに目をそばだてる者はないが、七、八年昔では、かなり目立つ色であつた。

赤いコートなどはよつぽど勇氣や決断力がないと着られない色だつた。

それでもハイ・ミスたちの三十四、五歳はまだはつらつとしているから、着こなすこともできるが、

〈主婦〉

だの、

〈母親〉

だのというコトバが、強い規制力をもっていた舟子は、どうしても赤いコートを着ることができなかった。

(似合う、と思うねんけどなあ……)

と思ひながら、そうして、デパートの売り場では、赤いコートに手を通しながら、買うことは遂にしなかつた。その代り娘の恭子に赤い服を買つて、欲求不満をまぎらせていた。そのころの娘は小学生である。

娘は中学生や高校生になると、赤やピンクをいやがり、女子大生の今では、身辺に若い娘らしい彩りは全くない。

紺・茶・グレイ・黒・白……Tシャツやジーパン、セーター、ざっくりした毛糸のコートとか、とにかく、男か女か分らぬ色合いのシロモノを身に着けている。

それは舟子もそうで、若いころは地味好みであつたが、三十過ぎ、三十半ば過ぎになつて、急に華やかな色が好ましくなつてきたのだ。

新聞や雑誌の婦人欄には、

「中年になると顔色が沈み、肌が衰えるので、すこし華やかな、派手めのものを身につける方がよい」

などと示唆^{しき}してあり、舟子はそれに暗示を受けたのかもしれないが、自分でも、なぜかわからず、赤色が好ましくなった。

それも、暗い赤よりも、ぱっと明るい赤がよい。真紅^{まぐ}というような。

それからして、黄味の勝った、赤よりもオレンジという方がびつたりするような色。

陽炎^{かげろう}色とでもいうような、ふんわりした赤。

そういう色にあこがれる。

あこがれながら、つい、同じお金を使うならPTAに着ていけるように、とか、すこしでも着る機会が多いように、という経済的な思惑から、《上品そうな》色合いの服を買ったり、作ったりしてきた。

焦茶とか、藤色とか、グレイ系統とかいう色である。舟子はあんまり自分の色彩感覚に自信がない。だから夫の目にも無難にうつりそうな色をえらんでしまう。

赤い服が着たいと思いつきながらそのまま年を重ねて、舟子は四十を過ぎ、いまはまた、ピンク色が好ましくなったのだ。

ピンクというより、

《桃色》

といった方がよいような色である。娘の恭子は、
「それ、ショッキング・ピンク、いう色やないの」

というが、舟子は無地でやわらかい生地、そういう桃色の服をまといてみたい、などと空想していた。

それとも、淡い、ロマンチックなピンクの服もよい。ふわふわのレースなんかつけて。

「どない思う？」

と舟子は娘に聞かす、

「どうぞご勝手に。パパに色キチガイ、いわれても知らんで」

などと娘は、本気に取り合ってくれないのである。

舟子は、娘が高校生になったころから、話相手にしてきたが、親身な話はできない。

娘は、舟子が《親身な話》をし出すと、

「そんな、わかれへん」

とか、

「あたし、そんな話、聞きとらない」

とすぐ立って逃げてしまう。

それも当然かもしれない。

舟子が《親身な話》というのは、夫の身内のゴタゴタと

か、夫のワルクチにきまつてゐるから、娘は逃げるのだ。

しかし、そんな話だからこそ、舟子は聞いてほしい氣もするけれど、娘の身になって考えたら、相づちの打ちようもないだろう。

「ママの話、ちっとも面白くないもん」

この娘は、わりにズケズケいいところがある。

舟子は、〈桃色〉のドレスを、ついに、自分だけの決断でつくつたのである。もちろんつくるときは井関久女子に相談する。久女子がそういう色や生地を搜してきてくれる。

「ええ、きつとお似合いになる、と思います」

と保証してくれたのであるが、デザイナーの感覚は、つねに世間より一、二歩すすんでいるので、舟子はちよつと効果のほどを危ぶんでいたのである。

だが、やつぱり着てみて楽しい。

ほんとに着たい色が、ほんとに似合う色かもしれない。目がさめたように若々しくやさしげな顔になっている。

舟子は満足である。

とても大学生の娘がいるなどはみえない。

隣の部屋へいった。夫の良平が、テレビを見ながら、オカキを食べているのだ。

「パパ。マリリン・モンローみたいにみえへん？ どう、この服」

と舟子はいった。良平はあたまをあげて一瞬、ギョツとした顔になり、

「何やそれ。トシ考えてみい、トシ。チンドン屋みたいやないか」

良平がそんな風な言い方をするだろうことを、舟子は予想していたのだ。

結婚生活二十年ともなれば、相手の出かたぐらいわかるのだ。

だから、

「何やそれ。トシ考えてみい、トシ。チンドン屋みたいやないか」

という放言も、ふだんならムツとしながらも、聞きのがせたのだ。

しかし、今日はすこし「ムツ」の度合いが強い。

舟子がかねて、夫あいてにマトモに会話のできるのは、ある種の実務的なことだけだと知っている。結婚生活二十年のあいだに、いつかしら、

(これはパパに話して)

(こんなこと、しゃべったってわからない)
と分けるようになった。

今では(パパ)のところをひそかに、
(オッサン)

と置き換えている。

(これはオッサンにいうとこか)

(これは、オッサンなんかにはしゃべったってわからへん)と分類している。良平は舟子より二歳年上の四十五歳、昔は色白で姿がよく(娘の恭子の色白は、父親に似ているのである)漆黒の髪で、わりに好青年であったが(舟子はそのにも惚れた)今は、頭頂が薄くなり、腹が出はじめている。いまもやっぱり色白で、そうみつもなくてもないが、全体にくすんだ色に染められて、じじむさい。機械を扱う商売で、現場で油まみれになるから、どうしても垢ぬけない点がある。

好中年とはいいがたい。

舟子は実家の妹相手に話すときは、

(ウチのオッサンなあ……)

などと、いつてやるのだ。

オッサンに話すのは、とりとめもない世間ばなし、親類の噂、つき合いのいろいろ、娘に関すること、食べもの、テレビ、身のまわりのあれこれ、要するにオッサンが、返事できる具体的話題である。

オッサンにいうてもわからへん、と舟子がひそかに思うのは、抽象的な話題である。

この仕分けは、どういうふうなことからいうと、たとえ

ば、酒の飲めない良平も、会社のツキアイで、得意先を接待したりしてむりに飲み、悪酔いすることがある。良平はトイレで、苦しみながら吐く。

「またブドウ酒を飲んだの？　ババ、あれ飲んだら必らず悪酔いするのに」

舟子は良平の背中をさすりつついう。

「いや、先方の奴がブドウ酒でないとあかん、いうさかい、つい、ツキアイでな……」

などと良平は嘔吐のあいまに喘いで、

「水」

「紙」

「タオル」

「あたま押えてくれ。首筋もんでくれ」

これが具体的話題である。

抽象的话题というのは、

(ねえババ……女が結婚するということは、きたないことをかくすことなのねえ……)

などという述懐である。

これは決して、女の怨み辛みや、アテコスリではないのだ。

舟子は、四十代になって、つくづく、そう思うようになった。

二十代の若い娘が、甘い夢をもって結婚すると、

(エライ目にあらうデ)

と舟子はいってやりたい。

悪酔いした夫の嘔吐を流す、そのへんに散った汚物の飛沫を拭く、便器の掃除、下水のゴミがひっかかっているのを竿の先でつつく、風呂の流しにからまった髪の毛の掃除、油でべとつく換気扇の清拭、台所のよごれもの、更には、舟子は寝たきりの姑を三年半介抱して送ったが、その下の世話。

ありとあらゆる、汚ないことをひきうけて美しくし、しかも、それを胸におさめて、かりそめにも、

(ああ、きたない。なんで私が、こんな汚ない仕事せんならんねん)

などとは口にせず、汚ないものを人目につかぬうちに始末しなければいけない。

そして、うわべでは、キレイなもの、美しいものしか知らないように、典雅にほほえんでいなければならぬ。

それが妻の仕事で、結婚における女の役割り、というものののだ。

そのくせ、子供に関するかぎり、オシッコであろうがウソであろうが、ちっとも汚ないとは思えないのだ。

そこも女の不思議さである。近くの主婦、坂元タ美子に

いわせると、

「わたしの友達に、今日は赤ちゃんのウンコの色がわるい、いうて指先につけてなめてるお母さんがいるわよ」

ということだ。舟子はそのままで出来ないが、恭子が赤ん坊のときは、食卓のそばでオムツを拡げて平気だった。

そういう、もろもろの、女心の不思議、女と結婚についての省察などが、良平の汚れものを始末している舟子のあたまに浮び、そういうことをしゃべりたいのであるが、良平にいったって返事のしようもないに違いない。

(そやから、どや、ちゅうねん！)

と叫び、ふしんに堪えぬという顔をするであらう。果ては、

(ええわい、そないゴジャゴジャいうのは、あと始末するのがうるさいのやろ、ほっといてくれ。ワシあとで自分で流すよって)

などと、見当ちがいの怒りにトチ狂ったりする。全く処置なし、である。

すべてそういうことは、良平にいったってしかたのない抽象論議で、舟子は、それを友人の坂元夫人や、習字教室で知り合った佐伯夫人などに、しゃべるのである。彼女たちの方が、ずっと話しごたえがある。

良平の扱いについて、舟子はかなり熟練したと思ってい

る。

良平が、どうすれば機嫌がよくなるか、わるくなるかを見分け、カジをとればよいのだ。

そのつもりでかかれれば、わりに良平は、しやすい男というべきであらう。

男の通弊^{つうへい}として、すぐ、ブーとむくれ、大きな顔になるが、総体としては精神のバランスがとれているほうで、大きな声を立てたり、荒々しい、ただけしいしぐさなどはない。

悪気はみじんもなく、人に親切なほうである。

唯一の快楽は仕事で、仕事さえしていればご機嫌なのだ。趣味も道楽も、とりたててない。

麻雀はできない。競馬・競輪・酒・女、すべて才能はないようにみえる。

強いていうと、仕事のホカの娯楽は食事である。

「メシ、メシ！」

と叫び、食卓につくと、うれしくてたまらぬように手をこすり合せ、好きなオカズが並ぶと、

「フムフム……フムフム」

と鼻唄を唄いつつ、箸をとる。嗜好^{しこう}は子供じみていて、豚カツとかビフテキとか、卵焼き、コロッケ、などである。魚はフライにすると食べるのだが、煮つけると箸をつけない。

い。

トーフの厚揚げを焼いて、ソースをつけて食べるという、へんな好みがある。

そうして食事がすむと、サッと眠る。テレビで見るものは、

「ババーン！ パン、パン！」

という撃ち合いの入る戦争もの、西部もの、ギャングもの、刑事ものに限られる。

一時、コイコイやトランプに凝っていたが、それらはべつにしてもなくても、人生で差し支えはないらしい。碁^ご、将棋、ひととおりは知っているようだが、それらがなくても、良平の人生には、なんら痛痒^{つよくち}を感じないらしい。

現場の技術者という仕事から、麻雀も酒もダメな男でもそれで通るのだらう。尤もここ一、二年は対外的な折衝もしなければいけないポストに据えられて、外部の人と飲んだりするようである。

かなり、やりやすい男だと思い、舟子は夫の機嫌のよいように、一生けんめいやってきたつもりである。

（これはオッサンにいうでもわからへん）

と思うことは伏せ、良平の波長に合せて人生をすごしてきたつもりである。

それなのに、いかなる風の吹き廻しか。

この頃は、

(いうてもわからへん)

と思うことを、敢て良平にいつてみたくなったのだ。

良平がショッキング・ピンクの服を見て、文字通りショックを受け、

「トシ考えてみい、トシ！」

と叫んだとて、良平ならそういうだろうことと、舟子は先刻、承知しているのだ。

だから何も怒ることはないのだが、このごろは、昔のように笑ってききのがす気にならないことが、往々、ある。

良平に抽象議論をふっかけてもしかたないと分別しているから、ひらき直ってアレコレいう、といった野暮はしないはずなのに、このごろはなぜか、敢て、その野暮を試みたくなっている。

舟子は、若いころはともかく、中年になってからは良平と夫婦ゲンカなどしたことはない。良平がやりやすい男であるのに加え、

「わたしが粋いきやからや」

とひそかに舟子は自負している。

粋というのは夫婦の舵のとりかたについてで、こういえば怒るだろうとわかっているのにわざとというのが野暮、怒らせないように、しぜんと聞く気になるように、うまく持

つていくのが粋、夫婦のあいだの呼吸も、

「粋」

と、

「野暮」

というものは、あるものなのだ。

いや、舟子はべつにそう区分けしてやってるわけではない。自然と体でおぼえた呼吸でそのへんの機微を会得し、中年になってヒマなとき、ふと顧みて「粋と野暮」というコトバにあてはめたのだ。

そのまま、ズーと粋で通せば、偕老同穴、共シラガの末まで粋な夫婦関係でやりとおせるであろうが、舟子はこのごろ、

(粋にやって、それが何ぼのもんや?)

という疑問をもつようになった。

四十二、三という曲り角のトシのせいかもしれない。

更年期をむかえ、情緒不安定になつてゐるのかもしれない。夫がむくれようと、ブーとふくれつらをしようと、言いたいことだけ言ってしまう、そういう夫婦のあいだの方が、粋なのかもしれない、と思うようになった。夫のいうままに、

「そうですね、そうそう、そうよ」

と言つてられるかッ！ という気になった。

まあ、ひらたくいえば、所詮は、舟子も中年オンナになつて氣むずかしくなつた、ということかもしれない。粹も野暮もないのだ。

「パパ、なんで男いうもんは、ふたことめには、トシがどうの、トシを考へる、というの？」

と舟子は夫の坐っているソファの端に、腰をおろしながらいった。べつにホメ言葉は期待していないけれど、あんまりミもフタもない言い方をするので、野暮な顔色にならざるを得ない。

トシなんて、物理的な年齢と、実物、実態とは全然ちがう。男というものは、そのへんの事情がちつともわかつてない。

まあそれは、良平だけの話で、べつに「男というものは」と、男ぜんたいの罪にしなくてもよいのかもしれないが。

その上、

「チンドン屋」

とは何という古くさいセンスだろう。ちよつと日常次元からはずれるともう評価の判断にウロがきて、ミソもクソもいっしょくたに「チンドン屋」でかたづけてしまふ、もつとほかにいいようないものだろうか、ちつとは発想の転換をしたらどやねん、と舟子はムツとする。

（トシ考えてみい、トシ！）

というのは夫自身のことではないのか。

男は年齢のわりに進歩がちつともない。あたまがうすくなるほどには、物の言いよう、口の利き方に、もつと熟練があつてもいい、と思うものだ。

女房だから、気楽にモノをいってでもいい、と思つていいのか。妻にはいいたい放題、放言しても許されるとは、何を根拠に信じてるのだ。

妻だからこそ、心してモノをいつてほしいのだ。

ヨソの人間には、良平も相応に氣をつかい、コトバを選択し、顔色をととのえるくせに、妻にだと放言して、むらな氣分をそのまま、ぶつつけても平氣なのだ。ヨソの人間はスレチガイの旅人、妻は生涯の同行者ではないか。

いちばん美味^{あじ}しいところは、妻にきかせるべきではないか。

ヨソの男や女に、いかに口当りのいい甘い言葉をいつても、何にも稔らないのだ。

「トシなんてねえ、三十五から先はなくなんのよ。その人の持つてる味だけになんのよ、パパ」

舟子はいいながら、

（あ、こんなこと、オッサンにいうたつてあかんか……）と無力感をおぼえている。そうするうちに、もう、どう

でもよくなつてしまふ。夫はいう。

「何か知らんけど、そんな赤いもん着て外へ出ていくのんか、お婆ンがそんな着たらみな、目エむくで。本卦^{ほんけ}がえりのチャンチャンコには、まだ早いやろ」

自分ではユーモアのつもりでいるらしい。

「いいえ、これからはずーっと本卦^{ほんけ}がえり、還暦風でいきますからね。マツカッカの服着て町中、のし歩いたるわ。

お婆ンがお婆ンじみたもん着てたら、よけいお婆ン臭うなるよつて、お婆ンらしくないもん着て、お婆ンになるのを防ごうというところ」

舟子は夫がふたことめには、舟子のことを「お婆ン」というのにハラをたてている。尤も舟子も内心では夫のことを「オッサン」と呼んでいるから、あいこであるが、少くとも舟子は口に出していったことはない。舟子はあてつけらしく「お婆ン」を連発してやった。

「いまはね、中年ほど派手な、あかるいもん着る、という時代になつてんの。中年の方が、あたらしいものに敏感やし、ねえ……」

舟子はおのずと、夫を啓蒙^{けいもう}する、という口ぐせになる。

これも、ここ三、四年、自分で思い当ったことの一つである。

良平というのは、(あるいは男、夫というべきか)言っ

て聞かせないとわからないのだ。

ナゼカ、男はひとつのことを思いこんだら、じーっとそればかり頑固に信じつづけている。

良平は、

「女は四十すぎるとお婆ン」

「お婆ンは、目に立つ派手な色を身にまとうと、チンドン屋」

「人間にはトシ相応の外見が必要」

と思ひ込んでいるのだ。

それを、四十五になつても(いや、四十五だからよけいに)訂正しようとしなない。

だから、良平の趣味はじじむさい。

そしてそれを上品だと自分では思いこんでいる。

舟子の考えるのに、それは多分に、良平の両親がかなり年齢がはなれ、トシヨリくさかったからであらう。

良平は六人姉弟の下から三ばん目だ。上に姉ばかり三人、下には弟、妹一人ずつという大家族である。長姉と良平のあいだは十歳もはなれている。舟子が良平と結婚したとき、舅^{しゅうと}や姑はひどく老けてみえた。良平は長男なので、戦前からの古い大きな家で同居したのだが、舟子から見ると舅たちは祖父母のように思えた。舅は勤めたことはなく、いうなら先祖からの財産管理で食つてきた人間である。戦後